

# 平成12年度前期日本語研修コース修了生の追跡調査報告

## —言語使用状況を中心に—

中村純子・佐藤友則・金子泰子  
合津美穂・下平菜穂・今村一子

キーワード：工学系・医学系の学生、研究活動、まわりの人とのコミュニケーション、  
言語使用状況、日本語のニーズ

### 要旨

工学系・医学系で構成されていた第2期の修了生が、研究活動および、まわりの人とのコミュニケーションにおいて、どの程度日本語を使用しているのかをインタビュー調査をもとに記述し、日本語に対するニーズを探った。調査の結果、研究活動においては、講義・ゼミが日本語主体で行われており、聞き取りに困難な学生の姿が浮かび上がった。またゼミなどにおける日本語での口頭発表の必要性などがあることが分かった。まわりの人とのコミュニケーションは、研究活動も日常生活も、ほとんど日本語が主体で行われていた。また大学内外の事務手続きなどで書類の記入等、日本語で行わなければならない、困難を訴えていた。

### 1. はじめに

信州大学留学生センター大学院入学前日本語予備教育（以後、日本語研修コースと記す）では、1999年9月に第1期修了生を送り出した。2001年11月現在では第4期の修了生を送り出している。その間、修了7ヶ月～8ヶ月後の留学生にアンケートおよびインタビュー調査を行い、コースの改善に役立てようとしてきた。

本稿は第2期の修了生のインタビュー調査をもとに、研究活動およびまわりの人とのコミュニケーションにおいて、どの程度日本語が使用されているのかを記述し、彼らの日本語に対するニーズを探ることを目的とする。

第2期は初級と中級のクラスに分かれていたが、本調査の対象者は初級の学生である。初級のクラスは工学系・医学系の学生のみで構成されていた。一般にこれら理科系の学生の研究における活動は、文科系に比して英語の使用が多いことが各大学の紀要等で報告されている<sup>1)</sup>。しかし、各留学生センターごとにニーズにあったコースデザインを考える上で、どの場面においてどの程度英語を使用し、どの場面においてどの程度日本語を使用しているのか、また日本語の技能として身につけるべきものは何なのかを調査することことは、欠くことのできないことであると思われる。

第2期の学生は次節でも述べるが、医学部、工学部、理学部、繊維学部に進んだ学生である。工学系・医学系と一口に言っても、学部により、また研究室により、日本語のニーズは多様であることが予測されるが、本稿はその多様性と、その中から共通性を見出すことによって、今後のコースデザインに役立てようとするものである。

## 2. 第2期のコースの概要と修了生の背景

第2期の日本語研修コース初級クラスは、第1期と同様、主に構造シラバスに基づいた授業が行なわれた。午前中のクラスでは『みんなの日本語』が主教材として使用された。午後の時間は漢字学習や総合的な学習、チュートリアルが当てられた。漢字学習では『BASIC KANJI BOOK』を使って授業が進められ、半年間におよそ250の漢字が扱われた。コースの最後には修了生による「自国の紹介」などの発表が関係者を招待して行われた。

第2期の学生6名（以後、それぞれF1、F2、F3、F4、F5、F6と記す）の背景は表1に示した。年齢は20代後半から30代前半であった。漢字使用の背景のある学生は1名のみで、5名は漢字使用の背景は全くない。進学先は他大学も含め、医学部1名、工学部2名、理学部1名、繊維学部2名である。調査時の身分は博士課程3名、修士課程3名である。F2、F3は母国での日本語学習歴があり、F4は研修コース入学の時点で、すでに日本に1年半滞在していた。その他の学生は日本語についてはゼロ・スタートであったが、日本語研修コースの修了の時点では、ほぼ初級の日本語能力は身につけていた<sup>2)</sup>。特にF2とF4は中級レベルの語彙・表現もまじえて話すことができた。ただし、F1は初級の日本語にもしばしば対応できなかった。またF1は「自分には漢字はそれ程必要ない」と認識していたため、漢字のクラスには途中から出席をしなくなった。英語能力については、F1からF5までは英語での研究活動が可能なレベルであるが、F6は英語での研究活動に際しても相当の努力を要すると思われる。

【表1】第2期の修了生の背景

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
年齢	30代前半	20代後半	20代後半	20代後半	30代前半	30代前半
漢字使用の背景有無	無	有	無	無	無	無
進学先の学部	医学部	工学部	工学部	理学部	繊維学部	繊維学部
調査時の身分	博士課程 2年	博士課程 1年	修士課程 1年	修士課程 2年	博士課程 1年	修士課程 1年
英語での研究活動能力	充分	充分	充分	充分	充分	不充分

## 3. 調査の概要

追跡調査は郵送でのアンケート調査と、それに続くインタビュー調査からなる。まず、「日本語研修コースについて」のアンケート調査を下記の要領で行い、全員から回答が得

られた。次にインタビュー調査を下記の要領で行った。調査対象者1名に対して2～3名の教師があたった。インタビューは学生の許可を得てすべて録音された。内容は、「日本語研修コースについて」と「現在の状況について」とに大きく分かれるが、「日本語研修コースについて」はアンケート調査の結果、より詳細な情報が必要であると考えられた点に絞って行った。

これらの調査から、修了生の現在の言語使用状況からニーズを探るために、次節以降インタビュー調査の「現在の状況について」に焦点をあて、記述する。

#### 1) アンケート調査

調査日時：2001年5月22日配布 2001年6月回収

調査対象者：平成12年度前期日本語研修コース・初級クラス修了生6名

調査者：追跡調査グループ（佐藤友則・金子泰子・合津美穂・下平菜穂・中村純子・今村一子 以下追跡調査グループと記す。）

調査内容：日本語研修コースについて

#### 2) インタビュー調査

調査日時：2001年7月随時 各2時間～4時間

調査場所：信州大学留学生センター相談室（F1、F3、F4）

追跡調査グループの1人の自宅（F5、F6）

信州大学工学部太田記念会館会議室（F2）

調査対象者：平成12年度前期日本語研修コース・初級クラス修了生6名

調査者：追跡調査グループ 各2～3名ずつ

調査内容：日本語研修コースについて・現在の状況について

### 4. 修了生の言語使用状況

#### 4-1. 研究活動

インタビュー調査の結果得られた研究活動での使用言語を修了生ごとに表2にまとめた。

【表2】研究活動の使用言語

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
講義 ＜教官の使用言語＞	日〔英〕	—	日〔英〕	—	—	日〔英〕
ゼミ ＜教官の使用言語＞	—	—	日	日〔英〕	日〔英〕	日〔英〕
ゼミ・講義 修了生の発表	英	—	英	日	日	英・日
ゼミ・講義 他の学生の発表	英	—	日	日	?	?
論文読解	英	英	英〔日〕	英	日	日
論文作成	英	英	英	英〔日〕	英	日

【注】日：日本語 英：英語 ( ) の言語は時々使用することを指す。以下同じ。

— は修了生に要求されていないことを指す。? はインタビューのなかで触れられなかったことを指す。

以下、項目ごとに留学生の言語使用状況を詳しく記述していく。

#### 4-1-1. 講義

講義を受けている（いた）のは、F1、F3、F6である。この3名の教官の使用言語は主として日本語である。

F1は2001年7月まで講義を受けている。講義は日本語で行われていたが、英語で板書を行ってくれる教官もいた。また、留学生担当教官が、すべてのクラスについて英語と日本語で概略を記したプリントを作成してくれている。

F3の場合も講義は日本語で行われているが、時には彼のために英語も使われる。F3は、自ら「ゆっくり話してほしい。時々英語も使ってほしい」と教師側に依頼しており、すべてのクラスではないが、英語の資料をもらったり、試験を英語で受けたり、試験の前に英語で説明してもらったりしている。

F6の場合も講義は日本語で行われているが、英語と日本語の資料が与えられている。F6が分からない時は、日本語の中に英単語を混ぜて説明がある。

#### 4-1-2. ゼミ

ゼミに参加しているのは、F3、F4、F5、F6である。F3、F4のゼミは英語の論文を読んで発表するというものである。F3、F4の教官および日本人学生の使用言語は日本語である。F5はゼミを2つうけている。主として日本語で行われており、テキストも日本語のものを使用している。時々英語の説明もある。英語の資料もある時もある。F6はゼミの際、資料は英語と日本語で渡されている。

#### 4-1-3. 講義・ゼミでの発表

講義・ゼミでの発表はF2を除いた全員が経験していた。そのうち、英語で発表をしていたのが、F1、F3である。F1は「医学部では日本人も国際学会のために英語での発表を要求されている」と言っている。F3も英語で発表しているが、その際、他の学生からの質問はなかったことをあげている。F4は現在は日本語での発表を行っているが、来日当初は英語で発表していた。他の学生から頼まれて、日本語での発表を行うようになった。F4は発表において、教官から「日本語能力が十分でないので、英語でやってもいい」という許可をもらっていたが、最近では日本語で行うよう指示されている。F4自身も「(学会などでも)英語で発表してもコメントをもらえないし、懇親会でも話を聞けない」と思っている。F5は発表の経験はないようだが、自ら英語で書かれていることを日本語で日本人学生に教えるクラスを持っている。F6は発表を英語と日本語で行っている。

#### 4-1-4. 講義やゼミでの聞き取り

講義やゼミに参加している留学生にとって重要なことは、講義・ゼミで話されていることを聞き取ることだが、全員程度の差はあるものの、困難なことをあげていた<sup>3)</sup>。

F1は日本語の講義は聞き取ることはできないが、内容が既習事項であること、教官側が英語が堪能で英語での説明があること、板書が英語であること、英語でのプリントがあること等で分からないところを補っていた。

F3は、教官の話はだいたい分かるようだ。彼の専門は数式が多いということも聞き取りの能力の不足を補っている。しかし時々全く分からなくなるときもある。その時は英語のテキストで自分で勉強したり、教官に質問したりする。他の学生の発表などはほとんど分からない。

F4は授業の内容はだいたい分かるようだが、分からない時は教師に英語で説明してもらっている。

F5は専門の日本語の聞き取りの難しさをあげていた。「最初は全く分からなかったが、今は20%くらい分かるようになった」という言からも、聞き取りにかなり困難な様子が分かる。

F6も時々英単語をまじえた説明はあるものの、分からなくて座っているという状態のようである。

#### 4-1-5. 日本語の読み

日本語の論文を読まなければならないのはF5、F6のみである。F5は、読むことが一番困っていると言っている。「漢字の調べ方が分からない。次に文法。論文の文法は初級の日本語の文法と違うし、長い。また、文体が普通形で難しい」ことを訴えていた。F5は読むことに1日14時間くらい費やすこともあげていた。F6も同様に読みの大変さとして、それにかかる時間の長さをあげていた。F6は専門の漢字の読み方が分からない時は、日本人学生に助けてもらっていた。

F1、F2、F3、F4は日本語の論文を読む必要は基本的にはない。F2は「博士課程は英語の論文のほうがいい。国際会議で発表できるから」と言っている。F4も英語の論文が中心のようだ。「世界クラスの論文はすべて英語であり、日本語の論文は少なくなってきている」とも言っている。

F1は論文はすべて英語なので問題はないが、患者の記録は日本語で書かれているので、それが読めないことを訴えていた。研究のためにそれらが必要な時、日本人の友人に翻訳してもらっている。F3も日本語の論文を読まなければならない機会は多くないようだが、日本語の論文をもらったときなど、チューターに読んでもらって、英語や数式で説明してもらっている。

#### 4-1-6. 論文の作成

全員基本的には日本語で論文を作成する必要はない。F4は、論文は英語での執筆を基本とするが、レジメ、アブストラクトは日本語で書いている。その際友人が助けてくれている。F6は今までにレポートを一度日本語で書いたことがあるようだが、将来も必要ということはない。

### 4-2. まわりの人とのコミュニケーション

修了生が研究生活および日常生活で、まわりの人とのコミュニケーションを行う際の使用言語は何かということを表3にまとめた。以下、それぞれについて詳しく記述していく。

【表3】まわりの人とのコミュニケーションの使用言語

①	F1	F2	F3	F4	F5	F6
指導教官	英	日〔英〕	日	日	日	日〔英〕
日本人学生	英	日〔英〕	日	日	日	
留学生	英	中	日〔英〕	日〔英〕	日・英	日・英
他の日本人	日	ほとんど 交流がない	日	日	日	特に記述 なし
事務の人						
大学内	英	日	日	日	日	日
大学外	日	日	?	?	日	日
医者	英	英・日	日	英・日	英・日	日

【注】①コミュニケーションの相手 中：中国語

#### 4-2-1. 指導教官・日本人学生・留学生・他の日本人とのコミュニケーション

F1 以外はまわりの人とのコミュニケーションは日本語が基本で、英語を援用するという形をとっていた。

F1 はまわりの人とのコミュニケーションの基本は英語であり、指導教官および日本人学生、さらに他の留学生とも英語を使用している。他の（一般の）日本人とのコミュニケーションにのみ日本語を使用している（使用せざるをえない）。極力シンプルな日本語を使っている。相手もそれを理解してくれる。複雑な問題に関しては、英語の分かる日本人に入ってもらって解決している。

F2 は指導教官とのコミュニケーションは日本語で、分からなかった時にのみ英語を使用している。聞くことが難しい。特に普通形で話されると分かりにくい。論文・研究について話す時、教官側がF2 が分からないと判断すると、英語を使用してくれる。日本人学生とのコミュニケーションも日本語を使用しているが、率直にものを言いすぎて、摩擦を経験している。そのことについて「はっきり言わないのが日本の習慣」と表現していた。F2の周りには中国からの学生が多く、中国語のできるF2 は彼らとのコミュニケーションには中国語を使用している。大学関係者以外の日本人との交流は特にない。

F3 もまわりの人とは日本語でコミュニケーションをとろうとしている。指導教官、日本人学生、留学生、さらに市民との交流会にも積極的に参加し、日本語を使用している。F3 は国際交流会館に住んでいて、共有のキッチンスペースなどで他の留学生との交流も多い。留学生が中国人・韓国人が多いことから、F3 が英語を教えて、彼らから漢字を教えてもらったりもしている。また、国際交流会館を通しての市民との交流も他の修了生より多いようだった。

F4 もコミュニケーションの基本言語は日本語である。指導教官とは以前は英語でコミュニケーションをとりたと思っていたようだが、今は日本語で行っている。日本人学生とも相手が英語を使用しても日本語で行うようにしている。一般の日本人が言っていることは100%は分からない。話すことはできるが、聞き取りが難しい。

F5 もコミュニケーションの基本は日本語である。指導教官とは専門用語のみ英語で行っ

ている。日本人学生とは日本語、他の留学生とも主として日本語であるが、英語も必要な時だけ使用している。一般の日本人とはほとんど交流がないようだが、買い物などの時に、店の人の言っていることの聞き取りの難しさをあげていた。

F6 はコミュニケーションの基本は日本語のようだ。指導教官とは英単語をまぜたコミュニケーション、他の留学生とは日本語ができない人とは英語で話す。趣味を通じて知り合いになった一般の日本人との交流もあるようだ。使用言語については触れていなかったが、日本語であることが推測される。

#### 4-2-2. 事務手続きに関係する人とのコミュニケーション

F1 のみほとんど英語で行っている。他の5名は日本語がコミュニケーションの基本である。

F1 は英語で十分だと言っている。日本語の必要な時、例えば「入管とかで日本語が必要な時もあるが、彼らは慣れてる」と述べている。

F2 は学校内外の事務手続きを基本的に日本語で自分で行っている。漢字使用の背景があるので、漢字が分かれば大体分かるようだ。市役所の国民健康保険の手続き、郵便局の振込用紙の書き方、旅行会社でのやりとりなど分からないこともあるが、説明をしてもらって自力で行っている。他の人を煩わせるのは悪いと思っている。

F3 は簡単なことは日本語でやっているが、難しいことは事務の人の助けが必要である。

F4 はほとんど日本語で行っている。特に自分で書かなければならない書類—奨学金の申請や博士への進学理由—など書くときは困っている。日本人学生に助けてもらっている。F4 は学部長に英語でも書類を書けるように陳情したこともある。

F5 も大学内、および市役所（国民健康保険の減額の手続き）、銀行などの大学外の事務手続きは日本語で行っている。理由は「英語では周りに通じない」ということである。しかし日本語では「言いたいことは言えるが、相手の言っていることが分からない」という問題がある。

F6 も大学内外の手続きを日本語で行っていた。分からない時は友人に聞いたりしている。

#### 4-2-3. 医者とのコミュニケーション

医者との会話は英語が得意な学生は英語で行う傾向にあった。使用言語の選択は医者の英語能力にもよる。

F1 は自分が医者であるわけだが、家族が病気になったときは英語で医者と会話している。

F2 は英語で会話できる医者とは英語で行っている。また、時に筆談をしたりしている。F2 は来日直後に病院に行かなければならなかったが、その時、日本語だけでなく、日本の病院のシステムなどが分からなくて困ったことをあげている。例えば初診のカードをどこで作るかが分からなくて困った等。

F3 は英語が得意なのだが、日本語で医者と会話をしている。それは医者の英語能力の不足で、誤解が生まれた経験による。

F4、F5 は英語ができる医者とは英語で、そうでない場合は日本語で話す。ただし、病

気の内容は英語で説明を受けている。F5 は風邪を引いて病院へ行った時、全て日本語で行ったようだが、医者の説明がほとんど分からなかったようである。

F6 は歯医者に行く必要があったようだが、言っていることが分からなくて医者を変えている。

## 5. 考察

### 5-1. 研究活動について

研究活動における修了生の言語使用の状況から、日本語のニーズについて考察する。

修了生は講義・ゼミへの出席がほとんどの場合義務付けられていること、そしてそこで使用言語は日本語が主体であることが分かった。このことは短期日本語研修コース修了生にとってかなりの困難を意味する。

講義・ゼミのクラスで重要な技能は聞き取りだと思われるが、ほとんどの学生が聞き取りが困難であることをあげていた。聞き取りの不足を補うものとして、講義・ゼミ内容に関する背景の知識、英語での説明、英語での板書、英語のレジメなどがあげられていた。これらが不十分な場合、また学生に英語の能力が不足している場合、かなり厳しい環境に置かれることになる。山下（2000）にも、留学生の講義理解における文字情報の重要さが取上げられていた。聞き取りの能力を補うこれらの補助の重要性を大学院側の教官に伝えることとともに、日本語研修コースにおいては分野別講義・発表の聞き取りに関する調査、取り組みが必要であると思われる。<sup>4)</sup>

講義・ゼミでの修了生の発表については、修了生の英語の能力が高ければ、英語で行える。むしろ英語のほうが歓迎されるF1のような場合もある。しかしF3の例に見られるように、英語で発表しても他の学生がだれも質問しないということに陥りがちである。事実F4は、そういうことのないように、日本語での発表に取り組んでいる。F4は日本人学生からも日本語で発表するように要求もされていた。研修コースにおいてもアカデミックな場面における日本語での発表、発表に伴う質疑応答、ディスカッションなどに対する指導が必要であると思われる。<sup>5)</sup>

論文の読みは、工学系・医学系はほとんどの場合、英語で行われている。しかし、F5、F6のように日本語の論文を読まなければならない場合もある。その場合は大変な困難がある。特に専門の漢字の読み方が困難なようだ。研修コースでは、少なくとも漢字の読み方を自律的に調べられるようにするためのプログラムの充実が必要であろう。

論文を書くことに関しては、英語で書けさえすれば、基本的には問題がないと思われる。工学系・医学系の分野では英語の方がむしろ歓迎される傾向にあるようだ。ここでは日本語能力というよりは、むしろ英語能力のほうが問題になる。

### 5-2. まわりの人とのコミュニケーションについて

次に、まわりの人とのコミュニケーションに際しての言語使用状況から日本語のニーズ

について考察する。

まわりの人とのコミュニケーションは、F1を除き、ほとんどの場合、日本語で行われており、英語は必要な場合のみ使用されていた。そこでは、話す能力と聞く能力が必要だが、話すことよりは、聞くことの困難を訴えるものが多かった。

指導教官とのコミュニケーションは専門の話などで英語の援用ができる場合が多いこともあって、聞き取りが困難でも何とかこなしていた。

事務手続きの場面としては大学内、郵便局、市役所、入国管理局、銀行などがあがっていた。自力でそれらを行っている修了生もいるが、大学の事務官や友人などに頼っている修了生も多い。ここでも聞き取りの困難なことがあがっていた。種々の書類への記入の仕方などが分からない学生もいた。理科系の学生の場合、論文などの書き方を指導する必要はあまりないものの、日常生活における書類の書き方など指導する必要があるように思われる。例えば市役所での健康保険の手続きの問題が複数の修了生からあがっていた。このような予想される場面に対するシラバスの作成・指導も必要なことであると思われる。

また、日本語能力の不足をまわりの助力により補っていることが多いことを考えると、まわりの人とうまくコミュニケーションをする能力の養成は不可欠であると思われる。

医療関係に関しては、医者が英語ができて、さらに留学生に英語の能力があれば、問題はない。病状の説明は初級を終えたレベルでもある程度は可能である。しかしF3のように日本の医療システムなどの知識不足からくる混乱を避けるためにも、少なくとも日本の医療システムに関する知識を日本語研修コースで早い時期に教えることが必要だと思われる。

## 6. おわりに

今回の調査で、理科系の学生であっても、日本語の必要とされる活動が、研究面においても日常生活においても多いことが分かった。特に日本語研修コースで初級を修了し、専門に進んだ留学生の日本語能力と必要な日本語能力のギャップを埋めるものが必要であることは明らかである。専門教育とのギャップをうめるために、専門教育への橋渡しをどのように半年間の日本語研修コースのなかに組み込むことができるのか、今後検討を要する。<sup>6)</sup>

## 注

- 1) 例えば庄司(1993)など。一般に日本語研修コースには理科系の学生が多いが、信州大学留学生センターは文科系である教員研修生等も受け入れている。第1期の学生は教員研修生のみで構成されており、日本語に対するニーズは第2期の学生に比して、高かった。詳細は下平他(2001)を参照。
- 2) 修了生の日本語能力については修了直後は修了テストの結果等で、ある程度評価できるが、修了後、9ヶ月を経た修了生の日本語能力については、客観的な評価の基準をまだ設けていないので、評価が難しい。
- 3) 聞き取りが困難な理由としては、背景の知識がない、語彙・構文などが分からない、また音、表現そのものが聞き取れないという様々なレベルの原因が考えられる。また、これらが複合されて聞き取りができないということが考えられるが、これについては更に精査を要する。
- 4) 例えば金久保(1993)には文科系(言語学)と理科系(構造工学)の講義において構文的差異(接

続詞のパターン、発話の長さ、主語のあらわれ方、終結部の形式、倒置)があること等があげられていた。

- 5) 専門教育における留学生の口頭発表に焦点をあてた詳細な調査はあまり多くないが、三浦(1999)、古本(1999)によってなされている。
- 6) 日本語研修コース修了後の日本語教育の充実・連携も望まれることである。信州大学留学生センターは研修コースの終わった学生の継続的日本語教育を目的として、中上級レベルの学生に対する日本語教育をSUNS (Shinshu University Network System) を通じて2001年4月から実施しており、調査対象者の中ではF2とF5が受講している。

## 参考文献

- 金久保 紀子 他 1993 「講義の日本語における理科系・文科系の特徴」『日本語教育』80号
- 下平 菜穂 他 2001 「日本語研修コース修了生の追跡調査—非漢字圏学習者のケーススタディ」『信州大学留学生センター紀要』第2号
- 庄 司 恵 雄 1993 「研究現場における日本語使用に対する留学生と教官の意識格差—研究留学生の日本語使用状況調査の報告を中心に—」『岡山大学留学生センター紀要』第1号
- 古本 裕子 他 1999 「専門教育における留学生の口頭発表(2) 使用言語について」『金沢大学留学生センター紀要』第2号
- 三浦 香苗 他 1999 「専門教育における留学生の口頭発表(1) 指導について」『金沢大学留学生センター紀要』第2号
- 山下 直子 2000 「外国人留学生の講義理解—理解に影響を与える要因とストラテジーに関する意識調査から」『日本語教育』107号

## 参考資料 [インタビュー調査での質問項目—現在の状況について]

大学での勉強や、まわりの人との関係、生活のことについてお聞きします。まず、勉強について教えてください。

- 1-1 講義やゼミなどの授業を受けていますか。それは講義ですか。ゼミですか。その講義・ゼミのなかではどんなことをしていますか。
- 1-2 そこでは全部日本人と同じことをしていますか。日本人と同じことをしなくてもいい場合は、具体的に教えてください。
- 1-3 授業やゼミの、先生や学生の話の聞き取りはどうですか。
- 1-4 日本語の論文・レポートを読みますか。困っていることがありますか。
- 1-5 日本語で論文・レポートを書きますか。困っていることがありますか。
- 1-6 発表は日本語でしますか。今までの発表はどうでしたか。
- 1-7 授業などで使う日本語以外に、日本語の学習は続けていますか。
- 2-1 まわりの人とのコミュニケーションは、すべて日本語ですか。うまくいっていますか。(自分でここを変えたほうがいいと思うこと、指導教官に変えてほしいことがありますか。)
  - ・指導教官と
  - ・日本人学生と
  - ・留学生と
  - ・他の日本人と
- 2-2 事務手続きは、すべて日本語ですか。困っていることがありますか。
  - ・大学の中で
  - ・大学以外で
- 2-3 医者にかかったとき、話す言葉は日本語ですか。困ったことがありますか。
- 2-4 今までに、まわりの人とのコミュニケーションや生活の面などでどんなトラブルがありましたか。
- 2-5 トラブルの時、あなたはどうしますか。相談する人はいますか。
- 3 その他、今の生活や勉強について話したいことがあったら、どうぞ。